

貴司山治「日記」一九三四年（昭和九年）（二）

浦西和彦

七

ここに紹介するのは、貴司山治の昭和九年三月二十七日から十二月九日までの未発表日記である。

貴司山治の日記は、毎日の日々の出来事を、その日にこまめにしるした日録といったものではない。断続的に記録されている。回想的に記された部分もある。

この貴司山治日記のおもしろさは、例えば七月二日のところに、「中野のことを少しこゝへ書きつけておく」といったように、貴司山治の中野重治観がやや突っ込んで書かれていたり、九月二十七日の窪川稲子『牡丹のある家』出版記念会や十月十七日の林房雄入獄送別会などの模様を通して、貴司山治とほかのプロレタリア作家たちとの人間関係が描かれていることである。

また、六月十八日の裁判公判で、日本共産党支持をやめた理由だけでなく、君主制廃止の問題までも、転向の理由として裁判官から追求されていて、昭和史の貴重な資料のひとつになるであろう。貴

司山治日記は独自の時代的証言としての価値を多大に持っている。

なお、五月五日に出でくる「関西文学」同人との「二三時間雑談」した、その内容については、「貴司山治氏との文学談」として「関西文学」昭和九年六月一日発行、第一巻二号に掲載された。そこで貴司山治は、大月桓志に川口浩の「否定的リアリズム」について意見を求められ、日本では社会主義的リアリズムを文字通り創作活動に実行することは弾圧を食って不可能だと述べている。

九月二十九日に、「労働者第一課」を中央公論社の佐藤観次郎に送ったのは、さきに長篇小説「地下鉄」序編として、唯物弁証的創作方法のスローガンを忠実に実行した「出郷」（中央公論）昭和八年十一月一日発行、第48年11号）を発表していたからである。長編「地下鉄」の一部として執筆された「労働者第一課」は、「中央公論」に採用されず、結局、「文化集団」昭和九年十一月一日発行に掲載された。

十一月十三日に出てくる小説「裸木」は、岡田謙三の画と共に、「東京日日新聞」昭和九年十一月二十〇、二十三、二十五、二十七、三十日、十二月四、六、九、十一、十三、十五、十六、十八、二十一、二十二、二十五、二十八日夕刊に二十三回掲載された。

十二月九日に「ボーギー」「イワンとイワンの喧嘩」について「少しばかり書いておこう」とあるが、書かれなかったのか、その部分は存在しない。

貴司山治日記

一九三四年（昭和九年）

三月二十七日

やはり、留置場や刑務所からかへった時は深く眠れず、すぐ眼がさめる。これがつゞくと体がかかなり悪くなってくるのだ。今朝は早くから眼があいてしまった。子供はひと晩ねむると、もうきのふのことは忘れ、これまでパパと一緒にゐた時の気持を思ひ出したとみえて、そして父親が珍しいとみえて、抱きついてきてはなれない。終日、子供の相手と、手記の整理と、大阪行きの方策にくれる。

五月十日

妻、子、女中一同で大阪からかへった日。

一と月あまりを大阪で暮らしたことになる。その間に母が死んだ。大阪に向って立ったのは、四月七日だった。その前晩に「母危篤すぐこい」といふ電報がきた。私は遊びにきてゐた佐野順一郎夫婦と話してゐる所だった。母の死す既定の事実になってゐたので、もっと早くかの地へ行かなければならなかったのを、留置場を出て、いろ／＼用が片づかず、ぐず／＼してゐる間に向ふから催促の電報がきたのだ。私達の困つてゐるのをみて、佐野夫婦がそのまゝ留守番にゐてくれることになった。それで、私達は一家を挙げて翌朝の超特急にのつて発つことにした。

大阪へ着いたのは夕方だった。そのまゝ大阪駅の構内から城東線の電車にのりかへて、天王寺まで行き、そこから又、郊外電車で帝塚山の、善ちゃん夫婦の家へ。——母は去年の十二月に私達と別れたまゝ、そこで病臥してゐるのであった。私達が善ちゃんの家へ着くと、家の中はひっそりとして昏く、看護婦と、よしちゃん夫婦の外、だれもゐなかつた。玄関から上つたすぐの、いつもの八畳の部屋に、母は案外平和な表情をして、しかしとても瘦せおとろへて、ねてゐた。私と悦子は傍へよつて二言三こと、口をきいた。母は私たちがやってきたことを大へんと喜んでゐるらしく、動きにくい口を動かして、割合沢山な言葉を出した。あまり話さずぎてはよくないと思ひ、頃を見はからつて私は二階へ上り、着物を着かへた。

共治はいつもの用心深い性質をあらはして、自分のおばあちゃんの病室へはいるのをいやがり、病人の傍へ近づかなかつた。無理に近づけよとすると、泣き声を出した。共治をこの上もなく愛してゐる母はそれを淋しげに笑つて見てゐた。共治は生れた時から半歳近く育ててもらつたおばあちゃんを覚えてはゐないのである。それはかれが大人になつてから、どうしても思ひ出すことができないかれ自身の知らない思ひ出である。

私が二階で、縁側の椅子にかけてゐると、悦子が上つてきて「お母ちゃんが、伊藤さんにもつと話したいのやけど、話をするしんどと辛くなるさかい、よろしういうて……といやはつた。」といふのである。私はしばらく考へてゐたあとでいった。

「何をいひたいと思てはるんやろか？」

「そら、いろ／＼……うちのことや、共ちゃんにやりたいといふ株券のことや……」

「あんたのこと？」

私はちよつとわからなかつた。

「そやないか、お母ちゃんはおもう自分が死ぬとおもてはるのやよつて、あとのことをつたのみたにきまつたある」

——それは、母が死んで行くものゝ礼儀として、自分の娘を尚よろしくと、その夫に一言いひたいといふ氣持だと、私にも漸くわか

つた。その利那に階級とか社会とかを超越した悠久な人生——といふものに対する一種の感情が私の胸におこつた。

何十年といふ生活の旅の終りがきて、さらば／＼とかなたに見えなくなつてしまふ際に、その人があとにのこす自分の子や孫やの、ゆかりある人に挨拶をして行くといふさりげないことながら、いかに平常はみようともしない自然としての世界に思ひを致さしめることか。

私は、萬代池の縁にともる灯がちら／＼と硝子戸にうつるのを見ながら、暫く煙草をすつてゐたあとで、もう一度母の傍へ下りて行つた。母は眠つてゐたが、その眠りは至極浅いとみえて、血色のうしなはれた瘦せおとろへた顔に、わずかに生きてゐるものゝしるしのやうに、時々眼を開けて、あたりをみるのであつたが、間もなく私が傍に座つてゐるのを知ると、大きく兩眼をひらいて、私以外にだれが枕頭にゐるかをたしかめるやうに、ねたまゝ見廻して

「悦ちゃんから、もうきいて、くれはつたでつしやろけど……福岡新田の、わたしの、名儀のな、株が、……五十株だけ、ありますねン。それを、共ちゃんに、ゆずりませよつてに……」

途切れながらさういって、「共ちゃんに」といつた時、ゆつくりと長くひつぱつて発音した。

「三月初めに悦ちゃんがこゝへきて二千円の信託証書を頂いて……」

それから、去年は共ちゃんに千円も頂きまして……その上、その株券を貰ひますと、お母さんのものはみんな共ちゃんもらつてしまつて、悪かありませんか。大勢あんだの孫があるのに……」

私は母の顔をのぞきながらいつた。すると母は、母の性格としては、殆どみうけたことのないある頑固な執拗な調子で

「いゝえ、そんなこと、ありまへん。新田の株は、共ちゃんに、上げることに、とうからきめてまんね。あんに、今まで、いはなんだけですよつて、どうぞとつとくれやす。」と押しつけるやうな声を出した。それは、もし私がそのことを拒むならば自分は安心して死ねないといったやうな、遺言はぜひ背いてもらひたいといったやうな、死に臨んだ者の我意は当然尊重すべきであるといふことをいひたがつてゐるやうな、そうした声であつた。私はしばらくだまつて母の顔をみてゐた。母はいくらか亢奮して乾いた唇をなめながら、念を押すやうに、外の孫はそれ／＼おぢいちゃんから何かもらつてゐる。あとから生れた共治には、おばあちゃんがやらないと、仲間外れになる——といふことをいつた。しかしそれはくつつけた理屈で、今死に臨んでゐる母には、他のどの肉親よりも共治が可愛いのであつた。悦子の生んだ孫を一番親しく感じてゐるのであつた。「この子は頭が大きくて耳がさとして、恐ろしく賢い子だ」といふことを、母は私が刑務所にはいつてゐる留守中、毎日のやうに孫を

湯に入れて、頭を洗つてやりながら自分の娘にいひ／＼してゐた。傍にねて、夜中に小便をさしたり、眼をさまして泣くのをねかしかつたりをみんな母がした。その母が大阪へかへる時に、私の家が一文も金がないのを知つて、持つてゐた千円の金をそっくりそのまゝ、

共治にといつて行つた。去年中の生活に私達はその千円をすつかり使つてしまつたのである。母が遺産を私たち一家にくれたがるのは、私達が貧乏だといふことを心配してゐるのも一つの理由であつたに違ひない。私はとにかく、母の意志通り、母の遺すものを何によらずそっくり貰ふつもりでゐた、外のだれにやるよりも自分たちが貰ふ方が遙かに有意義だからである。他の孫達にも別けてやるべきでないかといつたのは、単に一応のお世辞にすぎない。それを真にうけて、ぜひと、私達を説き伏せようとするらしい母の様子をみて、このことで母を勞れさせてはならないと思つたので、私是一つお辞儀をして

「それではお母さん、いたゞきます。」

とよくきこゑるやうに答えた。

「ええ、そうしておくれやす。」

母はよろこんで、そのあとから

「おほきに……」

とつけ足した。それはひどく疲れた表情の中から出た言葉であつた。

悦子は、この会話の途中から傍へきてゐるが、その夜ずっと母の傍にゐて、妹と交りばんとに看病した。そして翌朝、私がおきた時に「伊藤さんが承知してくれたので安心だ」といふ意味のことをいってゐると私に告げた。

正午前に、茨木の義兄（健治）と沢良宜の義兄（清三）がやってきた。

母はこの二人の兄を傍へよんで、ちゃんとした「遺言」をしたから二人立会ひの上でできておいてほしいといふ趣旨で、きのふのことを話した。

「そうしやはつたらよろしあつしやろ」とおとなしく賛成したのは沢良宜の兄だったが、茨木の兄は母のこの宣言をきくと「さよだすか」と答えたきり、うんともすんともいはず、打ち沈んでしまった。その様子に母は不安になったのか「これは二人への相談ではなく、自分の意志をお耳に入れておくのであつて、伊藤さんにもすでに話して承知させまし、現物は江原に預かつてもらつてある」といふことをいった。

母が二人を枕許へ呼んでゐる間、私は二階にゐて知らん顔をしてゐた。やがて、茨木の兄が上つてきたが、先きに引き上げてきてその辺にねころんでゐた沢良宜の兄をみると、

「そんなら、もう去のか。」

と打ちしはれて、声をかけ、私の顔を見ようとはしないのである。私にはそれがおかしくてたまらなかつた。何とその不都合なことが、何といふ悲劇がこの男の胸中に今おこつてゐることか。

母が死んでしまつて、私たちがもう東京へかへる間際になり、汽車にのつて一緒に大阪へ出る時、すぐ鼻先きにゐるこの義兄に私は母のたつての遺志だったので額面にして五千円程の株券をもらつておいたが、あなたには何かこれについて別の考へがあつたのではないか、ときいてみた。からかひ半分にきいたやうなものである。すると愚かなこの兄は正直にそれを誠にほしかつたと告白し、そのことを合理化するために、おちいちゃんが死にぎわにそうしろといつたので……と嘘をついたのであつた。しかし、流石に自分の今しやべつてゐることをそのまゝにしておいては工合の悪いことになるのをさつたのか「しかし、あれはお母さんのものやさかい、お母さんのいはれるやうに処分するのがよろします。親類のうちどこになど持つておればそれで結構です。その代り、うちが困つたら東京へ借りに行きます。」といふのである。

「そうですか。」と私は答えておいた。しかし、こういふ際、この兄には少し容赦なくハッキリさせておかねばならないと思つて「今おちいさんの話で思ひ出したが、おちいさんのなくなる一年前の、あの先祖の法事の日に発表された遺産別けの内の悦子のもらへ

る一万円といふのは、いつもらへるのですか？」

兄はつつこまれてあはてたやうに、福崎新田へ貸しつけたことになつてゐる二十万円とか十万円とかの金が返り次第、必ず渡す、あの一万円はその債権を父の遺産として皆がわけてもらったもので、まだ返らないからだれも現金をもらつてはゐないのだ、といふことを口早やにくり返してしゃべるのだつた。

この兄は、書けばきりのない面白い小説的題材に富んだ男で、もと／＼よくある性格破産者の型にすぎないのだが、相当頭が働いて目先きが早く、物事に持続性がなく、投機がすきで、りんしよく、人にだまされたり、おどかされたりして、とんでもない借金を作り、泣きおとしや、嘘が先天的に上手で、到底さきの見込がないといふので癡嫡にしたのが父の大きな失敗であつた。孫の修が相続すると同時に、この兄は親権者として、再び財産の処分ができる身分になり、そこをつけこまれて、町のサギ師共に二度だまされて、二万円程まき上げられた。二度目の一万円をまき上げられたのはイカサマ賭博につれて行かれ、一昼夜の間にそれだけの金を賭けてまけたことになり、みなに押し伏せられて証文をかゝせられた。自分の名前の肩へ「奇二修親権者」とかけといふ先方の要求にさすがに最初はかなり抵抗して争つたらしいが、相手のゴロツキ共は、義兄をなぐつたりくくつたりして、二三日どこかへ監禁したらしい。その揚句

に、要求通りの文句をかゝせられた。サギ師の一派はその証文を更池の田中清のところへ持つて行つて、どう脅したのか、とにかくあまり伶俐でない田中は、自分で一万円立替へて払ひ（何だかへんな話である）その証文をとり戻した。結局一万円とられたのは田中だが、それをいつかは茂木の奇二の方で払はなければならぬ。二度とこんなことにならぬやうにと、田中や、川本（清三）たちが義兄を禁治産者癡分（親権停止）にしようとした。すると兄はそれ／＼親類中をかけ廻つて、得意の泣きおとしをやらかし、そんなことになれば首をくゝるとか、上海へ行くとかいつて騒いだ。そしてとにかく今は一時的におとなしくなつて暮らしてゐるのであるが一兩年の間には亦必ずこれに類したことをやらかすに相違ないのである。私はふと思ひついて、この際私たち一家が母にどれだけの金をもらつたかといふことをハッキリ話しておくのもいゝ事だと思つて、私の刑務所にゐる間に千円もらったことまで、話した。

「へえ？……さよだつたか？」

とかれは明らかに不愉快そうな返辭をして、そのまゝ黙つてしまつた。

それからのことは母の死んだ後のことであるが、遺産の処分に関する母の遺言のあつた日から、母は萬事安心してしまつたものか、がく／＼深みにおちるやうに衰へて行つた。

母の安心の一つには、私の今度の警察における「転向」といふことが加はつてゐる。私は今年の一月中頃までは「転向」を肯せず。二三年の実刑をくつてくる決心でゐた。その一旦の決意を翻させた理由の主たるものについてはすでに書いた。(いや主たる理由は私自身が人間的に、かつ政治的に、弱かつたことだ。それは書いてゐない。)その外にさきにも書いたが、消極的に私の、刑務所行ききの決心をにぶらせる事に、母の存在があつた。去年の十一月に、母と別れがけに、私は自分が他のプロレタリア作家のやうに転向せず、刑務所へはいる積りだから留守の間をよろしくたのむといふことを改まつてのべたのである。勿論私のこの決心は郷里に多少のこつてゐる父の遺産の始末(特に妹一家へ贈与する父の遺産の分の始末をつけてやる必要があつた)をつけにかへつた理由でもあるし、その時妹に泣き悲しまれた原因でもあるし、大阪へ引き上げてきてからも、茨木の義兄がひどく改まつて、何とか態度を更へてくれないかといふことを、一家一門の総意として、いはゞ膝詰談判のやうに私にした所以でもあつた。

私はそれらの一々を逆はずに断つた。そして母に留守中のことをたのんだのである。母は、義兄が私に膝詰談判をしてゐる間、次ぎの間で結果を案じて、話の様子をきいてゐた。そして私の義兄に対する返事を逸早く知つて、失望落胆したらしい。しかし、母は何一

と言の不平も、私に対してはなかつた。かの女はその一生涯を通じて境遇に対する忍従の心が極めて強かつたのである。母は私に対して「必ず引き受けます」と答えた。そして、私たち一家が東京へ引上げる日、梅田駅まで一緒にきてくれて、汽車が動き出すまでプラットに立つてゐた。その時の母の姿が今でもあり／＼と眼にみえてゐる。

「お母さんは大分やせて顔色が悪いやうだがどこぞ悪いのと違ふか？」

と私は汽車の中で悦子にいった。

「うん、うちもそない思つてたところや」

と妻は答えた。東京へかへつてから、ある日、悦子が「文芸春秋」の医者の座談会の記事をよんでゐて、突然「お母さんはきつと胃癌や」といひ出したのである。それがやはり適中した。こちらから、胃癌かもしれないから一度医者にみてもらふやうにと、茨木の義姉あたりに、(母に知れないやうにするため)悦子が手紙をかいた時は、向ふでも気がついて医者にみてもらひ、胃癌の宣告をうけた所だと知らせてきた。それが一月上旬である。私はハタと行詰つた。母に死なれては困るのである。尚念のために阪大病院の小沢博士にみてもらつたら、やっぱり胃癌だといふことだつたとの返事がきた時、私はすでに留置場の中にあつた。友人の中井玄乘氏から、妻から

出した照会の手紙に対する返事がきて、手術の不可能と、死期が三月中下旬だらうと書いてあるのを、私は警察の特高室で読んだ。それは二月の下旬だった。そこで母の意識の明瞭な間に一度見舞ひに行ってくるやうにといふので、子供と女中と犬(犬はそのためにジステンパーにかゝつて死んだ)を平井肇君の所へ預けておいて、妻が看病に行ったのである。母は一人できた娘をみて、私の身の上に変化のあつたことを覚さつており、「伊藤さんに留守中あんだ方を預るといつて約束したけれど、それも果たせそうにないから私が死んでもあんだ方が困らぬやう、私がお父さんからもらつてゐるものを全部あんだと共にゃんにあげる。」といった。妻は「貴司は態度をかへ、刑務所へ行かない方針にしたさうだから、今警察につかま

てゐるが、間もなく出てくるし、裁判の方も必ず執行猶豫になるから、もうそのことについては安心してほしい」と答え、母は「そうですか」とわかつたらしかつたけれど、やはり、私自身が枕許へ姿をあらはした時に、そのことがまぎれもなくほんとうだったと思ひすつかり安心したらしい。私が「転向」して、刑務所へ行かないことになつても母はやはり自分の遺産のやり場は私たち一家以外にはないらしく、四月七日にはそのことを第一に私にいひ出したのである。

そして四月八日、九日とみる／＼弱つて行つた。母にとつては恐

らくもう何事も終つたのである。そして、母は十日の午後まだ日のある内に死んだ。

私は留置場内で心臓を悪くしたらしくそのころ体が息苦しくて時に心悸亢進のやうな兆候をおこした。十日の午後、子供を散髪につれて行つてやり、それをすましたあと、自分自身の散髪を、一月以來留置場の中のまゝでゐるのを漸く刈り終へた時に、女中(トミ)が共治を抱いて走つてきて、早くかへれと告げた。私はそこ／＼にしてとび出し、家へかへつてみると、母はもう意識はなかつた。かすかに鈍くなつた眸をあいて、たえ／＼に息をしてゐた。あたりには悦子、善子、初枝、清三、健治、律子(お律さんは母を姉さんと平常よんでゐる)の实子義子の外に、善子の夫の上島新吾や、私や、間もなくやつてきた江原金兵衛その他来合せてゐてゐたいいな人たちが皆集つてゐた。父の時にはこれらの人たちが殆ど皆間に合はなかつたのである。

母は、春の日の午後の薄くらがりの八畳の部屋で、こうした多くの近親達にとりまかれながら大した死の苦悶なしに、終りに近づく程静かに、あのいやな最後の痙攣もなしに、火が消えるやうに、息を引きとつた。

女たちは息のなくなった母の傍へよつて皆泣いたが、自分も涙が浮んだ。息の消えた母の体は急に神々しい今迄よりもより高い存在

になったやうに、みな目の目に映った。

夜に入って、私と清三、新吾の三人が靈柩車に陪乗して、五里ほどの道を春日村奈良まで行った。二時間かかり、着いたのは十二時頃だった。十二日に、自宅で父の時のやうに坊主と神官とがきて、葬式を営んだ。私は十一日に子供を大坂へつれて行き、大丸で水兵服を買って着せた。その葬式の前後から、私はかなり体が苦しくなった。(それはずっと後までつゞいたが秋に入って大体恢復した。)

母の死後、私は茂木の家へは行かず、妹夫婦の家の近所の姫松園アパートの一室に親子三人でゐた。女中は妹の家にゐた。この姫松園アパートにゐる間中、私たち夫婦仲がへんに悪くなつてゐた。それはあとから判断すると二人とも体が悪くなり、そのことに互ひに気づかず、何故か冷淡にしあつてゐると思ひ合つたゝめだ。事実、私は妻に対して何かしらその態度が面白くなく、黙つてゐて口をきかない日が多かつた。

それを妻の方では急に私がそんなに冷淡になる理由が思ひ当らないといつて泣いた。私はかの女が大坂へきてすっかりだれてしまつてゐるといつて怒つた。それに「転向」後の暗い気持。それからすべてを挟められ退けさせられた範囲でやり直さねばならぬことに對する重荷の感じ。生活のスランプがきたのだ。私たち夫婦はめい／＼エア・ポケットにおちこんだ。なるべく早く、とにかく東京へ

かへらなければ仕方がないので、一ヶ月目に亦厄介な職場、東京へかへつてきたのである。私はしかし至つて不機嫌であるが恐らくその八〇%までは思想上の、生活上の苦しみでなく、心臓の衰弱してゐる苦しみであらう。

○大阪捨遣

四月十六日

善積守居に逢ふ。杉並署と、警視庁の野中警部補とが、東京へくればつかまへるといつてゐることを注意してやつて別れる。

四月二十二日から二十五日迄

郷里高島行。金を作るために。金は漸く千円あまり出来た。半歳位の生活費にする積りだったが、東京へかへつた時には四百円になつてしまつた。自分の浪費癖が少々口惜しくなつて、暗い気持ちがつた。

二十五日には高島を出て朝早く小松島へタクシーで赴き朝九時半の汽船で和歌浦へ十一時すぎに着き、鯛と密柑の箱を両手にさげて、もう夏のやうに温い南海沿線を住吉まで電車でかへり、そこからのりかへて、帝塚山の妹の家へ着いたのは午后一時頃であつた。

二十六日

江原に連れられてかつて松崎天眼などの主催してゐたといふ食道楽会()といふのへ出て、夏向きの支那料理といふのを食ふ。

大してうまくなかった。

二十七日

南海高島屋で催す大阪割烹学校の食べ物会に旧縁によって自分たち夫婦の外に妹夫婦江原夫婦と皆で行く。半日遊んだわけだ。

二十九日

茨木の家へ母の三周忌に行く。雨がふった。

五月一日

今年はメーデーもみず。

五月四日

京都行。谷口の所へ話しに行きおそくから叡山へ上り、向ふ側へ下りて夜の京都へ電車がかへり、新京極を歩いて、茶をのみ、おそく大阪へかへる。

五月五日

南海高島屋で旧作同大阪支部の、今は「関西文学」同人の人々と逢ひ、高島屋内の支那料理店に集って二三時間雑談する。

五月六日

江原、上島二夫婦に私達夫婦三組が二輛のタクシイに分乗して奈良へ遊びに行く。このタクシイには閉口してしまった。

奈良へ着き、公園の裏側を歩き廻って写真を大分とる。白糸の瀧の畔の茶店で名物のわらびもちを江原が十皿位、私が七皿か八皿位

食った味は忘られない。

大阪へかへつてくると夜に入つてゐたが、大阪側の人々に留別の意味で、私たちからいひ出して支那料理へさそふ。六人で川口の天華俱樂部へ行き十時頃まで食事し満腹になつて、別れる。

五月七日

アパートを引ひ、茨木の家へ行く。私はいろ／＼用があるので、悦子、子供、女中をやつておいて、あす行くことにする。用といふのは野田君に逢つたり、関西文学の連中に逢つたり、あとは吉田君の所に泊ることになる予定。夜十時半頃、野田君の家を出て、歩いて程遠くない吉田貫一君を訪ね、十六ミリの使ひ方を教えたりして、泊つてしまふ。一緒にきた野田君は一時頃にかへる。

五月八日

午後茨木の家へ着く。休養。

五月九日

悦子はお律さんの御亭主田中清の病氣見舞に行く。善ちゃんのおつきあひで、一緒に行く。私は大阪市内へ出て雑用を足し、午後から京都の谷口の家へ行き、子供の写真をとつてやる。そこへ一青年がきて、一緒に外へ出、妙心寺近くのある画家の家を訪ねたが肺病でねてゐる妻君だけゐて、本人は不在。妙心寺の境内を歩き廻つて夜になり、私が二人を京極の銘茶屋へつれて行く。この家も昔と違

ってすっかりまづくなつた。しかし、私が刑務所へはいる以前、この店の開店当時からゐた女中が二人やはりゐる。但しすっかり大人になつてこすそうな顔になつてゐる。尤も一人の背の高い美人の方は子供の時からこすそうな女になるだらうと見当つけてゐたが今きてみるとその通りになつてゐるので預言的中したやうなものだ。一青年が谷口と私をこの食べ物屋のすぐ一二軒となりの何とかといふカフエへつれこんでくれる。相手になりに来た太ひ子供のやうな女給を抱いたりさすったりしてからかふ芸当を谷口善太郎君に一時間はかりみせて上げて、引き上げる。

青年はあとにのこつてまだのんでゐる。かへりのタクシイの中であそこは草間実といふ活動役者の細君のやつてゐるカフエだと谷口からきく。草間実といへばみたことはないが元の今東光の弟だといふことを知つてゐる。今東光といへばもう大分昔の名前となつてしまつた。そんなことを思ひ出しながら谷口と途中で別れ、汽車で茨木へかへる。

六月十八日

けふは自分の公判日である。母の死やその他で度々延期し、法廷の被告人の立つ場所へは立つただけは何度も立つてゐるので、もう事務的になつてゐるし、つとに「転向」した自分はこの法廷に立つことをことさら「事務的」にすませようとつとめてゐるので、朝十時

東京地方裁判所の陪審第二号廷といふのへ出頭した自分は別にとり立てた感情は何もない。所が法廷附近は大変な人出である。きけば亀石の方のいつかのコマ切り事件の公判がとゞであり、私などは新館三階の第一号廷といふのへ引越したといふので、長い裁判所の廊下をあたふたとそこまでかけつけた時は十時半頃で、裁判長の中里判事はすでに壇の中央に冠をかぶつて座っており、他の事件がしらべられてゐる。私は傍聴席に座つて暫く時間の経過するのを待つてゐた。

凡そ三十分も経つと、その「審理」がすんで、判事は壇上から鈍い眼をおこして、私の方をみて名をよんだ。私のゐる場所をちゃんと知つてゐるのである。私は立ち上つて、壇の真下の陳述台とかいふ机の前まで行つた。すると、すぐ名前や住所や年齢などを、裁判長は低声でなげやりな口調できいて行つた。私はそれに対してたゞ間投詞だけの返事をした。間もなく型のやうに、検事が立つて起訴理由をよみ上げた。その検事は、私の家へ昔出入りした江原盛弥を瘦せさせたやうな顔をしてゐて、検事といふ名前からくる威圧を少しも感じさせなかつた。

裁判長の事実審理は豫審調書の通りに至極簡単にはかどつた。私もあるべく早くすませたいのでひたすらたゞ間投詞の返辞だけで事が足りるやうにした。

この「審理」の一番かんじんの点はそんな所ないことは先方も又私の方でも百も承知してゐた。私は五月十日の東京朝日新聞に「治維法の発展と作家の立場」といふ四回つゞきの論文を書いておいた。その中に、自分は従来の日本共産党支持者としての社会的に知られてゐる政治的立場を今後はやめる——といふ一項があつた。

その政治的転向が私の警察を出てきた理由であり、けふの公判で執行猶豫にしてみらひたいといふ条件であつた。そのことを書いた上申書すら、私は裁判所へ提出してある。これについてのさまざまな感想等はこゝへは書くまい。裁判長は「日本共産党の支持をやめる理由について詳しくのべてみよう」といつた。それは予定されたプログラムだ。私はやはり、予定してゐた通りのことを、一、今の社会的状勢が、共産党支持者の合法的存在を許さぬまでに変化してゐること。二、自分は合法的分野で文学の仕事を遂行して行くことを決心したため、従来の政治的立場を抛棄することにした云々。三、文学は政治の指導に依存すべきものではあるが、日本の党は現在又当分の間は将来も文学文化の指導的能力を持たないために、作家として必ずしも党との関聯を必要とせざること。四、党と関聯すればいかなる場合でも必ずそれが暴露することを経験により痛感し、作家の生活を樹てて行く上に、社会的に關聯を絶つ必要すら発生してゐるといふこと。それだけのことを私は吃々としてのべた。すると裁

判長は「その外にないか？」と何度も促すやうにいふのである。「どうといふことですか？」と自分は顔をあげてきゝかへした。

「たとえばスローガンに対して反対だとか……」私は手記や上申書の中へ、「君主制廃止のスローガンの批判」（それも反対だといふ結論つきの）において、若干の眞実な考察をのべたことをハッキリ頭に浮ばせた。それは日本の君主制権力の明治以来の、肯定的部分と否定的部分との指摘。（党は単に否定的部分の煽動をのみつゞけてゐるが、歴史的にみればその肯定的部分が奈良朝時代にも存し、明治以後にも存し、そのことについての適當なる解明のないかぎり、そのスローガンを大衆に理解させることは不可能である。党がこの点にふれたことをみない。）随つて肯定的部分のみおとしからくるための、このスローガンによる大衆獲得の不達成。このことを自分はロシアの君主制の成立事情と比較して書いた。それは自分の手記にかき、今も写しをとつてある。

裁判長は上申書、手記の中のその項をよみ、それを今こゝで私にしゃべらせようとしてゐるのである。それをこの法廷で一席のべることによつて、私の取引は完了するのだ。私は目をとち、心の中で順序をつけた上、机の両側を手でおさへて、体を保持しながら、これらの「批判」をのべた。それは凡そ二十分位はかゝつた。私のこの君主制論は、このやうなことに關しての「学問」好きの当今の思

想係検事にとつても初耳の説であるに相違なかった。江森青年に似た検事は上半身をのり出し、耳をそば立てて、私のいつてゐることをきいてゐた。私は時々視線を上げて、検事のその熱心な眼つきを観察した。

私は二十分間はかりも、そのやうにして君主制廃止の問題についてしゃべつたが、結局そのスローガンが間違つてゐるといふのではなく、このスローガンをかゝげてたゞかつてきた日本の党の実践上の弱点を「批判」したことになる。それで被告自身の意見はわからないわけであつた。私の手記の中ではそういふことになつてゐた。検事局でも警視でもそのことについて何もいはなかつた。私は裁判所がその点に気がつかなければいゝかと念じた。しかし、頭の働きのいかにも鈍さうな裁判長は、私の「陳述」の語るのを待つて、ちよつと考へながら「それで……被告はこのスローガンに反対だといふのだね。」と軽くいつた。やっぱり気がつかないわけではなかつたのだ。私は洪面をうつむけて、暫くたつて「え。」といつてうなづくやうにした。

それで「審理」は終つた。弁護士は弁論の上、執行猶予を請求した。

最後に自分は「何か外にいふことはないか」といふ例の最終陳述を求められた。「いひたいことが三つあります。」といつて、私は今

後の自分の作家としての立場、政治的立場をのべ、検事の論告の中の、三年の実刑の請求に反対した。そして、言葉のはずみに、死んだ母のことをいつた時、自分は党のスローガンに「反対か？」ときかれて「え。」といつてうなづき、その同じ時間に、母のことをいつてゐる自分といふものに、名状しがたい感じがし、息がつまり、咳血でもする時のやうに胸がはりさける如く痛くなり、無理にさりげなく何かいはうとして、その声にむせんだ。うつむいて、じつとしてゐると、涙がたら／＼おちた。こゝがどこであるかを意識して、苦しかったが暫くのがれやうはなかつた。

裁判の終つたのは一時に近かつた。私は弁護士会館の休憩室へ行って暫く休んでから、かへつた。

六月十九日

けふ判決の言ひ渡しがあつた。

少し時間におくれ、法廷に着いてみると、刑務所からきた一人の被告が——それは一見して治安維持法の被告だとわかつた——刑の宣告をうけたゐた。

その被告はまだ若い男だったが体が木乃伊のやうにやせ、肩が病的につれ上り、顔色は青菜のやうで、血の気がなく、あと何ヶ月かで発狂しそうな金壺眼を虚無的に光らせて、刑務所からきた被告の座らせられる囲ひの中に座つてゐた。私が法廷に這入つて行つた時

にその被告がよび立てられたのである。青年はうすよこれた浴衣の肩口を寒々と高く張って、裁判長の正面の机の前に立った。裁判長は太った大きな顔を上げず、青年の顔をみないで、手許の書類めいたものをのぞきながら「被告を懲役八年に処す」と無造作にいつてのけた。その瞬間に笑ひを忘れたやうな虚無的な青年の顔が「ハッ」といつて一寸ばかり動いた。それよりも私の心を打ったのは、大勢の傍聴人のゐる傍聴席の最前列で裁判長の方を凝視してゐた太った青白い顔の断髪で洋服の少女が「八年に処す」といつた刹那に「あッ。」と小さく叫んだ声だった。私はその少女の方をみた。少女も私の方をみ、黙ってしまった。八年の刑に処せられた青年は、憎悪と反抗をこめた一層光った眼つきになって、黙々と傍にのき、刑務所からついできた看守に手錠をはめられてゐた。私はその青年が腰繩をつけられて、地下室の下り口を下りて行くのを見てもゐる時によび出された。

二年の懲役で四年の執行猶予といふ判決である。「上訴権は抛棄するね」と赤ら顔の裁判長が私の顔をみていつた。「そうします。」と私は答えた。それで終った。取引が終つたのだ。

私はもとゐた傍聴席の方へはもどらず、被告人出入口と書いたドアから、逃げるやうに廊下へ出、あとから出てきた弁護士と肩を並べ「うまく行きました」といふその声をきながら、構内郵便局の

前で別れた。夏の昼のむせ暑さがたゞよひ初めてゐた。私は郵便局の中へはいり、郷里の妹にそこで判決の結果を知らせる手紙をかき、吉祥寺の宅へ電報を出した。その間にも、私の眼の前にはあの非転向の一青年の惨憺たる姿がきら／＼と浮んだり消えたりしてゐた。そして私の頭のうしろではあの血色の悪い青ぶくれの少女の「ああ！」といふうめきとも叫びともつかぬ声が生々ときこゑてゐた。私は、私と視線を合わせたあの少女から私が貴司山治だと気づかれはしないかと懼れて、傍聴席の方をみないやうにして逃げ出すやうにして出てきたのだ。

私の判決の結果が、あの見知らぬ一青年の衰へつくした肉体の膏血を犠牲にしてあがなつたやうな感じがした。

しかし、そんなことを深く感じてみてもはじまらない話なので、間もなく私は理性的になり、法廷のことを忘れて、銀座の方へ歩いて行つた。どこかで食事をして腹をこさへようと思つて……。

七月三日

四谷の大木戸ハウスにゐる中野に逢つたのは、かれが控訴院の公判で執行猶予になって出て来て一と月たゞない頃である。だからそれは私が大阪からかへつた五月上旬だつたと思ふ。

中野のことを少しこゝへ書きつけておく。

私がそも／＼中野重治といふ男を知つたのは、一九二九年初夏

(吉祥寺へ越してから間もなくの頃) 単衣物か何かのペロ／＼を一枚着て板裏の草履のやうなものをはいて不意にやってきて、足が汚れてゐるからといって女中に雑巾を出させ、それで足をふいてその頃私のゐた二階の広い方の部屋へはいつてきた。中野はその頃「戦旗」の編輯者で、用談のあとで、編輯について、私の希望とか意見をきいて、それを何かのはしにその場でかきつけてゐた。(どんな意見か希望だったか忘れたが翌月、かれが早速それを実行してゐたのを未だに覚えてゐる。) このことで、中野といふ男は物事に確実性のある男だと思つた。しかし、それ以外の中野といふ人間の感じはあまりよくなかつた。

前から酒をのむといふことをきいてゐたので、尊敬する気にならなかつたのかもしれない。そして、勿論自分はこの時、政治的にどうのこうのといふ程度の何物もなかつたのか、はらず中野を政治的にそんなに高くはないと思つた。それは少し前に、大工町のアパートにゐる勝本に逢つたら「ある左翼の仕事をしてゐる人間を君に紹介したら、その人間がやってきて、貴司の所へ行って寄附金をたのんだら、本物かどうかからん。赤旗を持ってこい、そうすれば金をやるかといつて追ひ返された——といつてブン／＼フィンガイしてゐたが、あれは本物なのだから、そんなことはいはずに応分の寄附をしてやってくれ。」との事なので、第一そんな男の来たためしはな

いし、私は一九二七年以来評議会系のシンパサイザーとして随分方々へ金を出してゐて、赤旗を持ってこなければ真偽のわからぬやうな男を相手にしなくても寄附金の出し先きに困りはしないし、それに第一、可笑しなことにその頃の私はまだ「赤旗」といふものをみたことも、きいたこともなく、勝本のその話で初めて名をきいた位ボンヤリしてゐたわけなので、「一体君の紹介した男って何者なんだ、そんな嘘をつく所をみるとタチがよくないよ。今の内に、そんな人間はハッキリさせておかないとへんだぜ。」と逆に注意した位だつた。勝本はしかし、その人間は非常に信用のできる人間で嘘なんか決してつかない男だといひ、何かの行違ひだらうが、よくしらべた上、もう一度やるから、行つた人がその当人だと思つてつきあつてくれ。との事であつた。

その後、間もなく中野がやってきたわけで、かれはこの時「党に金を寄附してくれ」といふ用事できたわけだつた。私はその頃の一般の状況からいって、いきなり私程度の男をつかまへて、合法的に暮らしてゐる中野が「党に金を寄附してくれ」といふのは軽はずみすぎると思ひ、中野をとにかく左翼の虚栄心のある男と感じ「君が、勝本の紹介できたのか？」ときいた位である。その時の中野の返事では、その男はやはり嘘をついたことがバレて、こゝへこれなくなつたので自分が代りにきたのだとの事であつた。しかし、私は元評

議会の関係で金の関係があちこちにあり、結局左翼の運動に出しさへすればいゝのだらうから、君の話の分はこととはるといった。すると「あ、そうかそうか。」とかれはカンタンに自分の話を引っこめて、戦旗の編輯の話にうつったので、中野の持ってきた「党」の話もいゝかげんたよりなものではないのかな、と思つたわけだ。

そのあと数日たつて、無産者新聞の仕事をやつてゐた江森がきて、こゝからかへる足で中野が江馬修の家へ行き、酒をふるまはれたか何かしてよっぽばらつて、江馬に向つてヨメを世話してくれなどといつてゐるのに出会つた——としゃべつてゐた、それは事実かどうかよくわからぬが、それらの印象から私には中野が大へん政治的に低い文学青年のやうにみえてゐたわけである。その後、私は落合の片岡鉄兵の家へ文学大衆化の問題で、引っぱり出されて度々作家同盟の中央委員会といふのへ出向いて行つた。その時、一座のヘゲモニーを握つてすっかり皆の中心になつてゐるのが中野重治であるのを知つて大いにさきのかれに対する印象を改めた。

事実、鹿地とか、山田とか、川口とかに比して中野は段違ひに圧倒的だった。鹿地もかなり理論的——らしく長々と物々しげに口をきいたがその長い整頓した感じを与へる鹿地のおしゃべりから、欠陥をみつつけ出してきて、鹿地の議論を半こはしにしたり、根こそぎ引っくり返したりするのは中野だった。鹿地はそうされても中野に

向つて反感を抱いたり怒つたりする風はなかつた。鹿地以外の者はとりわけそうである。何回目かの会合の時、中野が中座してゐなくなつてしまつたら、そのまゝ議論が発展せず、中途半端でお流れになつたことすらある。

これは、あとになつても、又あとになるほどそうであつた。作家同盟のある間、中野は中央委員会乃至は中央常任委員会、ひいては同盟員全体の一種の頼られてゐる偶像の観があつた。

かれのやり口はなか／＼するくもあるのだが、容易に人に反感を持たせない、だれの世話もやかないで我身を庇ふのを第一にしてゐながら、だれからも尊敬されてゐる——といった独特の人徳があつた。それはかれが一九三〇年にシンパ事件で刑務所へはいる前にも多分にそうであつたが、出てきてからも更にそうであつた。かれが出てきたのは三〇年の十一月だったが、その時丁度作家同盟は、書記長の西澤や窪川や私が同盟員のいろ／＼な連中から大いに攻撃され、その攻撃が組織化されて分派になりかけてゐた時だが、中野はこの分派を粉碎する先頭に立つた。大衆的な会合の中で、私のやうに唯無暗に亢奮するやうなことなく、実に根気よくたゝかつた。そして西澤とか、窪川とか私は勿論、小林、立野、徳永、橋本その他のだれもが果たしえなかつたこの内部的紛争の解決を、自から果たして行つた。勿論紛争を解決した根本的なものはその時丁度ロシア

からかへってきた蔵原によって出された例の「古川の組織論」による全国的組織への方向転換であるが、それでもし中野がゐなかつたら、うまく納まったかどうか？

その後文学新聞が出されるやうになつてから、少しあとになつてからだか、かれはその編輯局へ加はつたので、いつも一緒に仕事をする機会ができた。前任の窪川のやうに、他の編輯部員から持てあまされるやうなことはなく、卅時間位の徹夜を、最後まで頑張つてよく働いた。この時が又私の作家同盟生活のクライマックスでもあつたわけだから一番盛んな時代に暫くでも中野と一緒に働くことのできたのはあとになつてからも楽しい思ひ出であつた。

一九三二年の弾圧にはかれは私より一と足さきにやられた。やられた内容は私はシンパ、向ふは党员で大分違つてゐるがひつかつた法律は同じ治安維持法だ。中野がやられて、鳥居坂署にゐた時、まだ合法性を有してゐた私が、同盟の大会で検挙され、鳥居坂署へ三日かしら、とめられた。その時私はうまく看守をゴマ化して中野と同じ檻へはいつた。こゝで中野と逢つたのは思はぬ拾ひ物だつた。といつて二人の間には大してこの機会を利用して打合はずべき秘密も何もなかつた。かれのききたがつてゐた作家同盟大会のことを私から話してやつた位のことだ。その時かれは長期の拘留に耐えて何事も否定しつゞけてゐることを私に告げ、皆によろしくいってくれ

といつたが、私は中野が始めからそうした態度をとるだらうと信じてゐたので、今更の感じはしなかつた。その時は私はすでもぐつた小林を始めとするその下の同盟の幹部たちから陰に陽に排撃されて、中央委員に大会で一旦選出されたのを、ややこしい陰謀風のやり方で更めて罷免されかけてゐたので、その話を中野にしたら、かれはそれをきいて私のために大変心外そうな顔をしてゐたのを覚えてゐる。

その日から二週間も経つて私は又捕まり、今度は起訴されて、豊多摩で暮らすことになつた。私が独房へはいつた時には、中野はもう一と足さきに到着してゐたが、一体かれがこの同じ刑務所のどの辺りに暮らしてゐるだらうかといろ／＼手をつくしてしらべ、とう／＼その室番号をしり、面会に行つたりする度びにいつもその窓の所を眺めたものだが寒くなつてもその窓はいつも開いてゐた。私は半年で保釈になり、出てきたわけだが、中野はそのあと二年何ヶ月かそこに住んでゐた。

三三年中、私はシンパ事件の実刑に服する積りで、積極的にあとの経験のため、困難な新しい仕事を遂行してゐたが、その間にも続々と友人達がいはいゆる転向した。無事にのこつてゐる古い連中では蔵原と中野とだけになつた。私はこの二人の名前をたえず胸に刻みつけてゐた。ことに中野は一緒に働いた近しい感じの男なのでよけ

私のための支え柱になってゐた。その内にも情勢の変化に動かされて、私は三十四年一月に入って、力及ばず退却を決心するに至った。急に中野との距離が遠くなってしまった淋しい感じがした。村山の細君へよこした中野の手紙(村山が「白夜」の中にそのまゝ引用してゐる)のことを、その折、宮木かたれから伝へきいて、よけい淋しく苦しかった。そして中野の健康をひたすら心の底に祈つてゐた。

私が警察から出て、大阪へ行く前にいきなりきいたことは、中野が控訴公判で突然転向を声明したといふことだ。

それをきいて、私は眉をひそめた。合点が行かぬ気がしたからだ。中野には不似合に思へ、一寸信じられなかつたので。

とにかくかれが病氣だといふことをきき、萬事をそれにかこつけて、かれの転向を納得しておくことにして、大阪へ立った。私が大阪からかへつた時には中野は執行猶予になって出てゐた。急いであひたいやうな、もっとあとがいゝやうなへんな気がしたが、住所を人にきいて手紙を出した。かれはその手紙によって、私に対して安心したのか、返事をよこした。夏の初め、私は四谷の大木戸ハウスに、細君と一緒にゐるかれを訪ね、三年越しに顔を合せ、あまり昔と變つておらず、たゞ疲れて暗い顔をしてゐるのをみて自分も幾分暗くなつた。かれは何も意見を吐かなかつた。用心してゐるせいも

あつたが、三年間の独房生活のために意見がなくなつてもゐるといつた感じだつた。話の末に「鉄の闘士型といふものは努力ではある程度までしか行けんのだね。それは先づ生れるものだと感じたね。」とかれはいつた。それは私も感じてゐたことで、かつ中野や蔵原はかゝる「生れた性格」だらうと信じてゐたのだが、その当の本人からさういふ挨拶をされたのでいささか面喰つて「僕は赤君をさういふ人だと思つてゐた」といつてしまった。中野は面を撲れたやうな表情をした。

七月十日

三月三十日に死んだ犬のことをかいておく。私は前からどう猛な犬を一匹か二匹か飼つておきたいと考へてゐた。それはたえずつかまつて留守になるので、私の細君のやうに非世間的な女が子供を一人相手にさうした時、わりに心丈夫にゐられるには護衛代りになる猛犬一頭が少くとも必要だと考へたからである。ことに私は三十三年中は保釈でゐたので、何れ又はいるとすれば二三年間留守になる。ぜひ番犬をそれまでに一頭飼ひ馴らさうと思つた。村山の家には犬を飼つてゐるのできいてみようと思つたが、折がなくかつ、村山籌子さんとは面識はあるが口をきいたことがないのでとつおいつしてゐる所へ立野信之が遊びに来、犬の話したら犬好きのかれは早速のり気になつて飼ふならばぜひシェパードを飼へとすゝめ、丁度と

ても立派なシエバートが村山の家に生れてゐるからきいてやらうといふ。その後、立野から手紙が来て、ブラック・ターンの名犬で世間に知られてゐるハラスといふの子で親にそっくりの雄が一頭今ゐる。あまり出来がいゝので家で飼はうと思つてゐるのだが貴司さんになら売つてもいゝが値段は八十円だといふ。生れて五ヶ月になる。云々とあつた。八十円を三十円づゝ三ヶ月に払はせてくれといふことと、一度見に行くといふ返事を出し、その後行かずにぐす／＼してたら、立野ではなく宮木がきて、シエバードは五ヶ月もすると他人に馴付かなくなるのと外にも買ひ手がいろ／＼いつてくるので、早くきめて引取つてくれといふ村山の細君の事伝をもつてきた。それが動機で、たしか宮木に案内されて、私と悦子とで落合の村山の所へ出かけた。悦子が一緒に行ったのは、私がるなくても、脾弱いかの女に、シエバードが飼へるかどうか、現物について考へてみることにしたためだ。行つてみると籌子さんは待つてゐてくれて、いきなり親犬と当の子犬とを部屋へ入れたので、忽ち床中泥だらけになつて、子犬の方はもう相当大きく悦子の腰へ泥足をかけて顔をなめようとするのだが、かの女は突きたはされそうである。何か私には近よらない。何しろ物凄いや元気で果してこんな荒っぽい犬を飼へるかどうかちつとも自信がないのだが、とにかく譲つてもらふことに話をきめてしまつた。

二三日して、籌子さんが自動車で運んできてくれた。サンルームへ上げてやったものだから忽ちその辺を泥まみれにしてしまつた。善積のゐた時だから、かれがいきなり相手になつて世話を焼き出したので、私の方は手がかゝらず助かつたわけだが、その代り、シエバートの特質を發揮し、私や悦子には敵意を持つてはえつき、すっかり善積にだけ馴れてしまふので、これでは困ると思つて、せい／＼私が相手になつたが、悦子は怖がつて近よらない。すぐとびついて突つ転がされるのと、まだ子犬だからすぐ咬みつくのである。赤ん坊などは用心しなければならぬのだが、共治は動物が好きで、この荒っぽいシエバードをちつとも怖からず、頻りに傍へ行きたがる。

日がたつにつれて名前をつけなければならぬのだが、村山の家で、この犬が荒っぽいせに無邪気で御馳走をこさへて貰ふ傍で待つてゐる内にとくり／＼居ねむりなどするといふので「赤ちゃん、赤ちゃん」と細君からよばれ、現に私の家へきてからも「赤ちゃん」とよぶと通ずるのである。とう／＼「赤ちゃん」といふ名前にしてしまつた。

夏の初めに、善積が工場へはいつて、家にゐなくなつたので犬の世話は何から何まで私がしなければならなくなつた。毎日朝日の散歩につれて歩くのに、とう／＼古自転車を五円で買つて、それにの

って、犬を走らせて、水道の路を一里も二里も走った。時には悦子と一緒に徒歩で犬をつれて公園の裏の方まで行った。かの女が綱を持って歩いてゐる内、私が先きの方へ歩いて行ってしまったので、犬はより多く馴れてゐる人の方へ行こうとするものだから、私の姿が遠ざかったのを見て、いきなりかけ出してとんでくるので、悦子はその力に曳かれて、息を切らしてついて走ったがとう／＼力及ばず、綱を離してしまつたりしたことがある。

「とても、あばれ出したら制禦できないから困る」
とかの女は犬のことを心配した。

だん／＼大きくなるにつれて、犬はだん／＼どうも猛になり、裏口へやってくる人間に対しては逆襲髪立てて凄いい勢ひではえる。それはいゝのだが、女中や細君にすぐじゃれてかみつくので始末が悪い。何とかして自分が留守になるまでにかみつくのだけでもなほしたいものだと思つたが、大人になればひとりではなるといふ事だ。

その内、秋になって、入獄準備のため郷里へかへって父の若干の遺産の整理をしてこなければならぬので、その間犬を村山の家へ預ける。小さい時に出た家だが、家の前までつれて行くと、もう半年以上世話をやかせた私をまるで忘れたやうに村山の家をみて騒ぎ出し、獅子さんが顔を出すとべつたんに座つて滅茶々に尾を振つて大へんな騒ぎようだ。少しあきれたがとにかく預かつてもらっ

てかへる。

所がこの時の旅行がうんとおびて、一ヶ月以上になつてしまったので、獅子さんは大分不服だつたらしい。十二月の初めに、東京へかへつてきて、すぐに私は村山の家を訪ねた。丁度村山知義がきのふ刑務所から出てきたといつて、ねてゐる所であつた。犬は私の顔を見るとクン／＼と鼻をならして尾をふり、一ヶ月間しょんぼりしてゐたやうな顔つきなのか、急に元氣になつて、クン／＼ではあきならず、正式にはえ出した。つれてきた時には私をおいてけぼりにしたので少しバカな犬だと思つて愛がされてゐるが、迎えにくると、そうではないので思ひ直した。自分の母親と一緒に住んでゐるためだが、母親の方は私をしらないから牙をむいてはえつく。「赤ちゃん」は同じほえてゐても喜んでほえてゐるので、首をそろえてほえる母親をおしのけるやうにしながら、しまひに母親がほえやまぬので、いきなりかみついた。

この日は夜になるまで村山と話してゐて、犬をつれて出たが、近所の窪川鶴次郎に逢ふため、タクシイをひろつて、小籠橋から戸澤三丁目まで犬をのせて行つた。

窪川の家で宮木と逢ひ、三人で高田馬場の近所の喫茶店へより、一時間ばかりしゃべつてゐる間、赤ちゃんは至極おとなしく私の傍に座つてゐた。吉祥寺までつれてかへるのにはやはりタクシイにの

った。この時、大阪からかへって翌年一月の末に検査されるまでの私は随分忙しかつた。宮本顕治はすでにつかまってしまつてシヤバにゐなかつた。ランチ事件がバレて党がいよ／＼その思想的、組織的破綻を表面に出してしまつた。

そうした中で私はとにかく文化聯盟の解散の必要を説きそのために、走り廻り、会合に出、腹を立て、情けながつてゐた。そしてこの活動中に私はいはゆる「転向」を考へるやうになつた。

つかまつた日に、やつてきたパイ連中が家の中をがさつてゐる時、赤ちゃんは庭の桐の木につながれてゐた。

「おい、庭にセパードがあるからやたらにうろ／＼してくひつかれても知らんぜ」

といふと四人ゐたパイ公はてんでに怖がつてかへるまで犬がとび出してくることを心配してゐた。

私の留置中に、大阪の母の病気がいよ／＼胃癌と確定した。相談の結果、悦子が一人で一と先づ大阪へ行つてくることにした。約十日間、子供と女中と大は四谷の平井さんの家へ預けることにきめる。宮木にたのんで村山にもう一度犬を預かつてくれるかときいたが、もうこりたとみえて断つてきたのである。しかし平井君は大好きだから十日位なら大丈夫だらうと、悦子がタクシイで吉祥寺から四谷まで女中に子供をおんぶさせ、犬も同乗させてつれて行つた。車の

中で、犬はとてもあばれて、もてあましたそうである。

かくして、犬は皆の留守中、平井君の家にあることになつたが、小さな平井君の借家の庭さきへつないでおくと、門の外を通る近所の子供やおかみさん連に、物凄勢ひでほえつくので忽ち町内の小言がおこり、困つた揚句近所の犬屋へ預けた。

そのことを私がきいたのは、悦子が大阪からかへつてきた三月十二三日頃だつた。「あ、それはいけない。多分ジステンパーにかゝつて死ぬかもしれない。」と私はいつた。平井君の無知識から、とんでもないことになつてしまつたと私はすっかり失望した。犬屋へ犬を預けるのは屠殺場へ預けるやうなものなのだ。

私が三月の末になつてやつと警察から出てきた時、犬はその二三日前に犬屋がつれてきて無事にかへつてきてはゐたが、妙に元気がなく、しょんぼりして、たえず首を垂れてばかりゐた。

四五日すると、果してねつてしまつた。ハナ水が出て目の調子が鈍つてゐる。ジステンパーに伝染してきたのだ。

吉祥寺の犬の医者をやんでみてもらひ、薬をもらつたが、大して悪性でなく、かつ大きいから大丈夫とは思ふが、純粹な犬ほど病気に弱いから気をつけなさいといつて医者はかへつた。小屋を温くしてやつたり、悦子も私も夢中になつて厄抱してやつたが、みるかげもなくやせ細つてしまつた。そしてひよ／＼と歩いて出て来、牛

乳だけを僅かになる位に弱ったが、幸ひいゝ日和がつゞいたので、その間に大分よくなり、食べ物を少しづゝ食べるやうになった。小屋へ行つてやるととてもなつかしがつて、体をすりよせてきて啼いた。

不幸にして三月二十六日の夜、突然大雪が降つた。朝起きてみると一尺位も積つてゐる。

「やあ、こりやしまつた。もう駄目だ。」

私はがっかりし、腹を立てた。急いで犬小屋へ行つてみると、一晩中に、犬は雪の寒さに中ちやうてられて、息もたええくくになつてしまつてゐる。もうとても恢復の見込みはないやうである。私ももういやになつた。

しかし、念のため、小屋から出して写真暗室へ入れて湿布をして温かくしてやらねばと思ひ世話をしてゐる所へ、長谷川進が訪ねてきた。この大雪の中を折角きたのだからと思ひ、犬の方を中途にしておいてその方へ行き話相手になつてゐると、おどろいたことにこの男は夕方になるまでぐずぐずとつまらぬことをしゃべつてゐてかへらうとしないのである。尤も犬もとても救かりそうに思へぬので、すっかりくさつた気持で自分も何だかめいりこんで動かたくなくなつてゐた。長谷川のやつとかへつたあと、犬小屋へ行つてみると、すっかり肺をおかされて犬はへたばつてしまつてぜいぜいいつてゐる。

る。

それを抱えるやうに、引きずるやうにして（とても重たく閉口した）家の方まで持つて来、暗室へ入れて温かくしてやり、エキホスなどをぬつてやつたが、もうどうにも仕様がない。人間のやうな呻き声を出してゐるのを十一時すぎまでついてゐてやつたが、あきらめて、ねてしまつた。

しかしさすがに氣になつて、夜中の二時ごろに眼がさめた。呻き声がやんでゐる。

やつぱり、はつとした気持になり、暗室をのぞきに行つてみると「赤ちゃん」は硬くなつて死んでゐた。そしてエキホスの匂ひだけがぶん／＼してゐた。

「死んでゐる」と私は妻にいつて、又ねてしまつた。ねる前に窓から空をみると、キラ／＼と星が出てゐる。まるで犬を殺すために降つた雪のやうだ。

朝、植木屋を呼んで楓の木の根の積雪をかきのけて、埋めてやつた。それから二三日して、私は一家をあげて死に瀕してゐる大阪の母の所へ行つて、五月初めまで大阪にゐた。大阪からかへつて、ある日、杉並署にその頃ずっと、私と入れ代りにとめられてゐる鹿地亘に面会に行つてやつた時、特高主任の草間が「おい貴司君犬はどうした？」ときくので自分が拘留されてゐる間に、十分氣をつけて

やれなかったので伝染病にかゝって死んだといふと

「君、そりや最初から無理だよ。君のやうな生活で、そういふ手のかゝる犬を飼ふといふのが大体認識不足ぢやないか」と先方では私をひやかした。

私はその時「認識不足」といふ相手の言葉を苦々しく思ったが、「赤ちゃん」は私の三三年中の生活のたゞかひの犠牲となつたのだといふことを感じた。

九月二十七日

窪川いね子の「牡丹のある家」出版記念会（レインボーグリル・六時）に出席。

この暑中、自分は殆ど人中へ顔を出さずにゐた。その理由は「転向」後の新しいやり方による仕事の準備のため、一人になってゆっくり考へねばならぬことが山積してゐたこと。第二に長篇『地下鉄』の一部である「労働者第一課」といふ五六十枚の短篇を書くのに七八月の殆ど二ヶ月をつぶしてしまつたこと。第三にこれからの文学生活で元の作家同盟の仲間間で僕の方で特に逢ひたいと思ふ人間は中野重治をのぞいてはたゞの一人もゐないといふことを痛感してしまつたこと（この痛感には相当多くのものを支払ひましたし支払はされもした）等々である。

どちらかといふと私は孤独なのが好きだし（そのために何ヶ月、

何年といふ間でも一人でゐてもひがみはしない自信を持つてゐる）

第一文学の仕事は一人でゐなければかどらぬ仕事なのだから、夏の初め以来、自分が孤独な生活に浸るやうになつたのは、いよ／＼本気で仕事に向ひ出した証拠でもあるわけだ。その外に、自分の孤独になりたがつた理由には、夫婦の問題があつた。考へてみると、私の保釈出所以来、三三年の初めから、私の妻はともへんになつてしまつてゐる。それについて、私に悪い原因があるとは少しも考へられない。私は何とか、自分の夫婦生活を立てなほすか、万一の場合清算するかする外はない。そのことの苦しい考へにとゞされて、世間を出て歩く軽やかな気持ちに夏中どうしてもなれなかつたのだ。

五月に「治維法の発展と作家の立場」といふ転向声明をかねた論文を朝日新聞に出し、さん／＼文壇を世間の悪声をあびたまゝ、黙つてひっこんでゐるやうな結果となつてゐるので、今夜の窪川いね子の出版記念会にしても、当然従来のかれら夫婦とのつきあひからすれば前以て発起人になつてくれ位のこととはありそうなものに、私の所へは林房雄とか、徳田秋声とか、小林秀雄とかいったやうな発企人のずらりと並んだ案内状がとゞいたゞけだつた。このことは私が文壇生活の外におかれてゐることをよくあらはしてもゐるが、それにしても私はこの案内状をみてフキ出してしまつたのである。私が窪川の出版記念会へ来てくれといふ案内状を、徳田秋声はまだい

ゝとして、小林秀雄から頂戴するといふことはどう考へても滑稽なことである。しかしこの滑稽は私のしたことではない。又私が文壇生活の外部に暫く出てしまつてゐるといふための責任でもない。普通ならこんな愚劣な案内状、このやうに下らなく組織された窪川の出版記念会へは出席しないでおくのが当然だらうが、それでは私が窪川にすねてゐるやうにみえ、かつ、あとで窪川が亦大いに氣にするだらうと思つたので、あえて出たのである。一つは記念会のやり方がこゝういふ風に愚劣なので、何だか本人のために氣の毒で、ほうっておけないやうな氣がしたのも事實である。これは私の方で未だかれらに対して持つてゐる一片の友情であらう。私のこの友情的な憂慮は、行つてみると果して的中した。案内状に五十人位並んでゐた発企人のお歴々の殆ど大部分が来てゐないのである。そしてやつてきたものは依然として「貧弱」な元の仲間たちが大部分である。

これはこの会の世話人や、お祝ひをされる当人にとって、教訓的な出来事でなければならぬ。会費は一円だったが、その一円の金を持たずに（ないために）出席したものが相当あつた。（友情だけ持つて）だから世話人たちは周章して不足額を有財者から集めて歩いて。中條百合子とか私とかは何円かづゝよけにとられた。こんなことまでを、結果において私は憂慮してこゝへやつてきたことになる。「名士」があまりきてゐないために、テールススピーチに動員で

きる人の數が知れてゐて八時といふのに、もう人物が払底してしまひ、会があつてなく終りそうになつた。会合を司つてゐる人たちは、かれらの目算には入れてない人間の中で、手頃な人間をみつつけようと場内を物色して、私をみつけた。私の目の前には大きな時計がかゝつてゐた。私は一としきり、立つてしゃべつたあとで、その時計をみた。十五分しか経つておらず、まだ八時半にすらなつてゐないのだが、私が座つてしまへばあとに、しゃべり手はゐないのである。私は悲しい氣持にもなつて勇氣をふるひおこし「まだ早いやうですからもう少しお話ししませう」とつとめてアトフォームな口調で、しかし何となく笑顔で淋しいこの出版記念会に集ふ人々を煽るやうな激しい調子で、あと十分間あまりしゃべつた。そして、砂をかんだやうな白けた氣持になつて座つた。（こゝういふ時いつもそゝうなるのが習慣である）

私は自分の話それ自体にはあまり氣のりがしなかつたが、わざ／＼こゝへ出てきた何よりの理由がこゝうした時間の穴埋めをしなければならなかつたことを、前から察してゐたことであつたやうな、そして一寸した友情の義務を果たしたやうな満足は感じたのである。

会のあとで、私は腹がへつたし、来合はしてゐた中野重治ともう少し話してゐたかつたのとで、かれを食事にさそつてゐる所へ、窪

川鶴次郎と柳瀬正夢とが近づいてきた。柳瀬君とは随分長く逢はな
いでゐて久しぶりなので、中野の外に柳瀬を加へて食事に行くのは
いゝと思つたが、窪川がともつて行きたいとハタでいふので、
それもよからうと、結局最初の意図に反して四人になつて「五万石」
へ行った。そこで食事し、少しばかり酒をのんだ所で、突然窪川が
私に向つて、「いかに君を怨んでゐるかわからぬ」といひ出し、よ
くきいてゐると怨みの正体といふのが、私に対するかれの心のひが
みであることが判明して、可なりおどろきあきれてしまった。かれ
は怨みをのべるといって、「君は村山や亀井を引入れて何かしよう
としてゐるのだらう？」といった工合に毒々しい、だが至つて愚か
な妄想をぶちまけるのである。

亀井が窪川をエセ詩人と罵つたのは、窪川が裁判所で卑屈なこと
をのべてきながら、亀井の意見を批判して「すべては階級実践の
問題である」とかいふ氣取つた言葉を使つたのに対し、亀井が「そ
んなことをいふヒマに自分の虚偽を自分でひんむけ、おれは窪川の
そんな言葉の一才一厘だつて信用しない」とほえつき、その後、エ
セ詩人とか何とかいっていがみあつてゐるのを、いつか私が時局新
聞にかいた「文学寸談」といふ短い文章の中で「亀井のいふことは
わかる」といったのに対して、又「白夜」に対する窪川らの非難を
排して「我もし作者なりせば」（『進歩』）といふ一文を書いて村山

の「白夜」を擁護したのに対して、かれは妄想を描いてゐるのであ
る。それにしても、組織がなくなつて作家が一人一人になつて仕事
をして行かねばならぬことになる、プロレタリア作家達の何とみ
じめな、弱い生活力だらう。かれらは孤独に——一人で仕事をして
行くといふことに——皆大なり小なり心をむしばまれて、ひがんで
ゐるのである。その癖、窪川たちは「文学評論」に抛つて物を書く
ことのできる立場にゐながら、夏中全く孤独に、おこちてしまつ
てゐる私に対して、ひがんでゐるのである。まるで逆だ。尤も私な
ら現にちつともひがみもくさりもしてゐないが、それが亦窪川のや
うな男には直接間接のいやな圧迫となるのらしい。それをいって、
かれは泣かんばかりの愚痴をのべ立てるので、私は目の前があまり
汚くなるのにヘキエキして、それをまぎらかすために、ヘラ／＼嘲
笑的に、窪川のいふことをつき返してゐた。

すると、そうした君の態度がどのやうにおれをくさらせ、夜もね
られないのだとほんとうに泣きそうなのでおどろいてしまひ、今度
は真摯な調子になつてハッキリとあやまっておく。とう／＼こつち
がまゐつた形だ。弱気の強気といふことがある。窪川はそんな男だ。
この弱気の強気男を、自動車で小瀧橋まで送つてやり、その自動車
で吉祥寺へかへつたら午前一時だった。

九月二十九日

一時に銀座の松阪屋で松岡、松崎の二人に落ち合ひ、「五万石」で食事をしながら「青服」の批評をきく。三年の三月に創られた「地下鉄」創作のための文学サークル「十九日会」も今ではとう／＼自分と合せて三人になつたわけだ。「唯物弁証法的創作方法」の時代から「社会主義的リアリズム」の時代に亘つても「十九日会」の仕事の仕方はそのために影響され、改めなければならぬことは何もで／＼こない。今では文学サークルといふことを口にする人は一人もゐなくなつたらう。思へば自分は執拗である。文学に対して執拗なのだらうと思ふ。「青服」の前の「労働者第一課」は七月中かゝつて書き上げ（いろ／＼な外的な事情のために苦しめられてなかく／＼書けなかつたのだ）このサークルの批評で（その時は四谷の友人の家で）さん／＼に欠陥を指摘され、すっかり書き改めた。その時も相手はこの二人きりだ。七月二十五日の夕方に私は田端のS君（地下鉄の運転手）の所へ行つて、F君とS君を相手に一と晩中、話をききとり、運転手の教課書を一と抱え借りて歸つた。それを勉強するのに丸一週間かゝつた。そして、「労働者第一課」をすっかり書き改めるのに八月中かゝつた。出来上がった新しい原稿を何度も松岡、松崎の二人によませた。二人が何かいふ度びに書き直した。やつとそれが出来上り、このやうな労働者の生活を描いたプロレタリア小説が現在のどのやうに重要なものであるかといふことを手紙

にかいて、中央公論の佐藤君に送つた。その二三日あとから行つて、同君にもう一度それを説明し、かつこの短い作品は自分の更生の第一作でもあるのだから、せひのせてくれとたのんでかへつた。その後、先方で話がどうきまつたらうかといふ問合せの手紙を佐藤君に出したら、返事の代りに書留めて原稿が返送されてきた。私は佐藤観次郎が善人であることを承知してはゐるが、ジャーナリストとして、文化人として、もう少し現在の日本の文学界の事情を知つてゐないでは話にならぬと思つて失望した。それは自分の作品が中央公論にのらないといふことよりも（その失望はほんのちよ／＼びりである）物のわかつたチャールリストが日本には滅多にゐないものだといふ失望である。實際この失望の性質はかなりに大きくかつ暗いものである。

「労働者第一課」が中央公論にのらなかつたので長谷川進の「文化集団」にのせて貰ふことにした。そうしてやつと艱難辛苦の「地下鉄」第一作がともかくも世に出、次ぎが今度の「青服」である。この方は前のやうに苦しまずに、五六日で出来た。しかし、出来栄えは前のよりもい／＼と自信してゐる。けふの批評でも、二人の幼稚な文学鑑賞眼では、どうといつて欠陥を指摘することは不可能なのである。自分の方でもさう直さねばならぬ所はないから、松岡が清書して、S君とF君の方へみせることにきめる。

四時前に二人と別れたが、とにかく自分はもう二年越し、細々ながらこうして依然として文学サークルをやつてゐるし、今後もやつて行くつもりである。インテリで東京の近代的労働者を知らない自分が、労働者の生活を書くためにはどうしても、サークルかそれに類似の方法による外に道はない。だから、私はこのやり方をもつて／＼経験し、こゝからいゝ文学を作り出すことによつて、このやり方の歴史的な正しさを確証しなければならぬ。

十月十五日

東京日日新聞に招かれて、三峰山へ行く。朝七時半の上野駅集合。行つてみると文壇の人が大部分で七八十人きてゐる。中村武羅夫、新居格、藤森成吉、徳永直、岡田三郎、浅原六朗、大木淳夫、武田麟太郎、井伏鱒二、勝本清一郎、千葉亀雄、その他いろ／＼大勢ゐる。汽車で熊谷まで行き、そこから三峰口といふ所まで電車にのる。その沿道の風景が大分いゝ。尤もその前に、長静に下車して舟で十数町川を下り、長静の風景をみ、長生館とかいふ料亭で昼食をとり、それから電車にのつたのである。途中、秩父セメントの作業場のみえる山や、武甲山といふ山やをみた時は、いかにも関東特有の山の形をしてゐると思つた。

電車をおりて三峰の山麓まで乗合。それから一行山に登る。案内状では何でもなく登れる山のやうにかいてあつたのでその氣で来た

人が多い。しかし実際はなか／＼険しい山である。四五時間かゝつて登つたが、自分は山へのぼるのは始めてのことだし、今年始めの留置場以来弱らせてゐる心臓がやはり十分に強くなつてゐないので、かなり疲れた。合力の男にうしろから押しもらつて最後の十数町をやつと登つた。山頂へ来た時は日がくれて電燈がついてゐた。精進料理をくはせられ、三峰社の大広間で大勢が雑魚寝だ。

翌朝、曇。神社の裏山の方にてきてゐる小さな小屋（東日学芸ハウスと称す）をみに行く。神主その他がその小屋の落成式と称し物々しいのりとを奏する。夏にこゝへやつて来た大宅壮一達が秩父觀光協会といふ土地の宣伝屋達にうまくのせられて、こんなケチな小屋を立て、こゝを文士の創作に滞在する場所として東日を通じて提供し、中里介山が「大菩薩峠」をかいたために現実の大菩薩が有名になつたのをあてこんで、文士に三峰を使った大衆小説でもかゝせ、土地の名を有名にしようといふかれらの遠大な計画なのだといふことがこゝまでできてやつとわかる。大宅たちはかれらにのせられて、觀光協会のためにわれ／＼をこゝまで引つ張つてきたやうなものだ。

しかし、自分がこゝへ来たことは悪い氣持はしなかつた。山へのぼるのは苦しかつたが、山の上の空氣はとてもすが／＼しく、いはゞ夏以来の俗腸をほんとうに洗はれる思ひがした。

この旅行でドイツからかへつてゐる勝本に急に逢ふ機会もないので、いつあへるかもしれないのが、その細君とも逢へたこと、去年の秋以来、喧嘩別れになつてゐた徳永直とこゝで逢つて口をききあつたことが二つの変つた収穫であつた。

十月十七日

新宿白十字で林房雄入獄送別会。自分は林のやうな男はとも好きになれそうもないし、つきあふのはいやだが、林がもつといやな奴であつても、治安維持法で入獄する以上、その送別会には欠席するわけには行かない。それに林個人はきらひだがかれが相當な作家であることには意義を感じてゐるのでそのことをまで憎むわけには行かない。しかし、この種の会合で、食事の始まる前の社交といふのがうるさいので、それが終つた時刻をみはからつて行く。丁度皆食卓についた所で、百人あまり来てゐる。

自分の座つた所は都合よく目立たない場所だったが、隣りに川口浩がゐて、向ひ側にきのふ三峰で顔をしりあつた紀伊国屋の田辺茂一氏がゐる。

テーブルスプーチの時刻になると、酔つぱらつた林房雄が胸に大きな赤いダリアか何かの花をつけて、場内をみまはしては、卓辞をのべさせる人間を物色してゐる。自分や中條百合子には何もいふまいと思つてゐたら、二人とも林の目について、指名されてしまった。

中條はまじめに林の健康を祈る旨をいって、林の挑戦をあつさり片づけてしまった。私はしかしそうはできなかった。少し長くしゃべつた。途中で林が半畳をなげたりした。かれが留守になる際に、中條とか私とか、かれにとつて気になる存在に、何か一言でもいはせて、安心して出かけたといふのがかれの気弱さのあらはれだらう。会の終つたあとで「三徳」で中野、窪川、坂井徳三、中條たちと食事をして、少しおそくなつて家へかへつた。

十一月三日

朝早く、吉川英治の「青年太陽」といふ雑誌に「明治神宮参拝記」をかくことをたのまれて今明治神宮へ行つてきたといつて笹本寅が朝の時頃にやつてくる。けふは明治節なので同神宮は右翼団体が何れも旗など押し立てて大勢参拝に行つてゐたそうだ。それに宮廷からの参拝があつて一時間ばかり人民の参拝が遮断されたため、大分長く棧道の手前で待たされた云々と笹本の話である。

二人で東中野の片岡貢君を訪ねる。この間から「実録文学の提唱」といふ一文を草し、その趣旨にのつとつて仕事をおこさうと、小金井の笹本の所へ話に行つてすゝめた結果かれが有志をつのつてけふその同人たることを承知した片岡と岩崎栄（日日記者）に逢ふ約束なのだ。片岡君と暫く話し、三人一緒に有楽町の日日新聞社まで行つて二階の客室で岩崎のあつせんんで木村毅君も同人たることを承知

したよし。この十三日に次ぎの会合を催すことにきめ、それまでに自分から田村栄太郎氏にすゝめることと、徳永直君にすゝめることを引きうける。徳永とはけふあとで中野の家で逢ふ約束になつてゐる。東洋軒でお茶をのんで暫く皆で話してゐたが三時に近くなつたので自分は他の人と別れて、四ツ谷大木戸ハウスの中野の所へ行く。

徳永がきて中野と話してゐる。この間の、三峰行の時の話で徳永のために中野と私とでかれが長篇「私の黎明期」を書き上げるための常設的援助機関を作つてやること、及び実録文学の仕事の仲間に加はれといふことを話す。前のことについては中野と三人でいろ／＼徳永のために骨を折り力にならうといふメンバーを二人の外に、窪川、森山、中條の三人にきめる。徳永は外に藤森成吉と川口浩にたのみたさそうだったが中野の考へでその二人は必要ないといふことになり、右総勢六人の集りをこの十三日に持つことにする。あとのことについてはよく考へてみると徳永自身がいふのでそのやうにして、別れる。

十一月九日

いい日和。この頃は雨がふらない。大宅壮一等の奔走で文壇フォトグループと称するものを作ることになり、その相談によばれて、東日横の東洋軒まで出かける。そこで北村小松、吉田謙吉その他の諸氏に暫くぶりで逢ふ。林芙美子女子あとより来る。物いふ機会を

失す。会が終つて大宅、北村、加納記者、自分の四人で有楽橋畔に建つたビルデイラッグの屋上のニューグランドホテルの outlet へ行つてハイボールを一杯のむ。

かへつてきてみると、徳永君から実録文学研究会へ加はることを見合はずとのハガキがきてゐた。

十一月十二日

弘之の控訴公判。大阪から上京の誠之出迎のため、真恒のおつかさんをつれて朝早く東京駅まで行き、誠之と落合ひ、二人を裁判所まで案内しておいて、美松の前で九時に逢ふ約束にしておいた朱牟田照子を迎えに行き、五分おくれでやつてきたかの女が父親から変なことをいって来たといつてその手紙を持ってきてみせるので、日比谷公園の中へはいり、あづまのベンチに腰をかけてそれをよみ「うつちやつておけ」といふ意見を加へる。それからかの女をつれて裁判所へ行き、待たせておいた二人に弘之の友達といつて引合はし、控訴院法廷で長い間待つてゐる。十一時にやつと出て来た吉田といふ判事をみると、まるでテキヤのやうな風態の男である。調べそのものも同じやうなやり方だ。自分を存証証人によび出す。誠之をそうして貰ふためにわざ／＼上京させたのに……と思つて一寸困つたが、前へ出て一席しゃべる。弘之はひよ／＼してかへつて行つた。その態度がなつてないので、イヤな気がする。かれに期待

してゐた朱牟田もがっかりしてしまつたらしい。四人で美松の地下室食堂で食事をする。となりのテーブルに片岡鉄兵が人をつれてきて話してゐる。風邪でもひいたのか首にホータイを巻いてゐる。出獄以来のかれを始めてみたわけだ。一寸話をする。話の合間に早くも傍にゐる朱牟田をみてそは／＼してゐる所雀百までの片岡鉄兵だ。

四時に、高島屋書籍部で松崎、松岡の二人に逢ふ日なので、誠に真恒のおっかさんを托し、朱牟田と二人で高島屋へ行く。書籍部の横の休憩室で待つてゐる所へ松岡だけくる。松岡が書籍部の方へ見張りに行つて松崎をつれてくる。四人で一時間あまり、休憩室に座りこんだまゝ、用を足してしまふ。六時ごろに別れ、朱牟田は三文銀座へ働きに行く。自分は「人絹」といふ長篇の仕事にけふ少しでもとりかゝつておく積りなので吉祥寺へかへつてくると、昼間大宅壮一と高原四明が来て、日日の夕刊小説を十五回か二十回ほどのものをあすすぐ一回でもいゝからかいて持つて来てくれとの事だつたといふので、少し困つたが、「人絹」の方をあつと廻しにしてその小説を考案する。労働者生活を題材にしたプロレタリア小説があつとを絶つに至つた今年の傾向を、その以前の Copp の極左主義への反動の一年間とよび、この反動の傾向を克服するために労働者生活を題材とするこの必要を強調した短い評論を国民新聞の文芸欄から

の依頼で書いてやらうと思つてゐるので、その実践として、労働者の生活を書くことにし「裸木」といふ題の短篇を一つこしらへる。その発端を一回書いてみて、ともかく書けたのでねる。

十一月十三日

朝早く、国民新聞への「題材選択の重要性」といふ十枚ほどの評論を書き、「裸木」の一回分と共に持つて出る。十一時に、出版社ばかりの高原君と東日社であり、一回分渡ししておく。それから国民までぶら／＼歩いて行き、岡山東君をよび出して、原稿を渡す。そのあと加藤英世と暫く話をし、二時に徳永のための会があるので、資生堂裏の五万石まで行く。徳永と中條の外だれも来てゐない。暫くして中野が来たが一時の約束で窪川と森山は三時にならないと顔を出さないのだから、こちらで恐れてしまふ。四時半まで話してゐる。五万石を出て、銀座を少し歩きロードハウスといふ所へはいつてお茶をのみ、自分は途中で皆と別れ、又もとの五万石へ、六時からの実録文学の会だ。木村毅君が冷害地視察に行つてゐて欠席、自分の外、田村、岩崎、片岡、笹本この六人の外に松江とかにゐる直木三十五の弟、植村清一君を加へ七人の同人といふことにきめる。あとで、山の小屋へ行つてビールなどのむ。

十一月二十日から十二月四日まで、関西旅行、この時のことは又書く折があらう。旅行中「文芸」に「リアリスト作家のロマンチシ

ズム」「行動」にの二つの評論を書く。

十二月七日

実録文学の会。

十二月九日

新協劇団見物。「ボーギー」「イワンとイワンの喧嘩」これについて少しばかり書いておこう。

(うらにし かずひこ／本学教授)